

値なく、抗インスリン抗体は陰性。空腹時に低血糖発作を認め、ブドウ糖補給により速かに改善した。IRI/BS比は常に0.3以上で非生理的高インスリン血症を認め、75g OGTT では2相性のインスリン過剰反応を示し、低血糖が誘発された。選択的動脈造影、エコーでは膵頭部に約3cmの腫瘍が疑われたが、CTやPTPCでは確診できず。4月20日手術施行。腫瘍は膵頭部に存在し、迅速標本にてリンパ節転移と周囲組織への浸潤を認め、膵頭十二指腸切除術を行った。肝転移(-)、腫瘍摘出30分後より血糖値は上昇した。腫瘍は酵素抗体法でインスリンのみ強陽性を示す。切除標本にて胃体部後壁に4か所、粘膜内に限局し低分化腺癌を示す早期胃癌を合併していた。

14) 胆道感染症における胆汁内細菌数と胆汁沈査の解離について

清水 武昭・大村 康夫 (信楽園病院外科)
青木 信樹・中沢 俊郎
塚田 芳久・村山 久夫 (同 内科)
関根 理

我々は胆道感染症の直接診断及び治療効果判定の手段として胆汁沈査を行うようになり3年が経過し、検討を試みた。検討症例はPTBD 123例、Tチューブドレナージ26例であった。細菌検査は胆汁を嫌気ポーターにいれ好気性、嫌気性培養を行った。胆汁沈査は胆汁採取後直ちに遠心し、尿沈査と同様に検査した。

結果：初回胆汁内細菌培養陰性例が52例であったが経過を追う毎に陽性例が増加し1カ月後には細菌陰性例は1例に激減、 10^5 個/ml前後に上昇した症例が12例、残りの39例は何れも 10^7 個/ml以上となり特に 10^{10} 個/mlとなった症例が4例あった。胆汁沈査では初回白血球多数例が48例有り総て胆道感染症例と考えられた。1カ月後には全ての症例で陰性化し、細菌検査と全く反対であった。

結論：胆道感染症では胆汁内細菌数よりも胆汁内白血球数のほうがより正確に感染症の実態を反映していると考えられた。

15) 胆嚢癌の超音波内視鏡診断 一症例を中心に

阿部 実・富樫 満
秋山 修宏・成澤林太郎 (新潟大学第三内科)
上村 朝輝・市田 文弘
川口 英弘・吉田 奎介 (同 第一外科)
内田 克之 (同 第一病理)
馬場 佳弘 (白根健生病院内科)
福田 稔 (同 外科)

超音波内視鏡を施行し以下の結論を得た。1. 超音波内視鏡(EUS)を259例に施行し、胆道系は胆嚢癌13例、胆嚢結石33例、胆嚢コレステロールポリープ24例、胆嚢腺筋症5例、胆管結石3例、その他5例、合計83例であった。2. EUSが有用と思われた点は、体外式USに比し高周波のため解像力が高く、胆嚢隆起性病変の鑑別診断に有用である。胆嚢の壁構造が描出されることから胆嚢癌の深達度診断に応用できる。3. 問題点は、内視鏡検査のため苦痛が大きく操作性不良。高周波のため観察可能範囲が狭い。

16) USによる胆道癌検診の試みとその成果 一手術例からの検討

筒井 光広・赤井 貞彦 (新潟県立かんセン)
加藤 清 (ター新潟病院外科)
小越 和栄・斉藤 征史 (同 内科)
渡辺 英伸・内田 克之 (新潟大学第一病理学教室)

新潟県は胆道癌の多発地域であることから、昭和60年度から2年間にわたってUSを用いた胆道癌検診が新潟県内の4地域において行われた。総受診者数は5,176名で、351名が精密検査を受診し、手術は昭和62年1月までに30例に対して行われた。手術診断は胆嚢結石が23例で、胆嚢の良性隆起性病変は4例であり、胆嚢癌は3例、4病変が発見された。良性の隆起性病変は2例が過形成ポリープで、炎症性ポリープの1例を除くとすべて径5mm以下であった。胆嚢癌の3例はUS検診時には、2例が隆起性病変で、1例が結石で発見されたが、精検時のUSでは3例とも隆起性病変を認めた。術後の病理診断では胆嚢癌3例はいずれもss浸潤を認めたがn。であり治癒切除し得た。胆嚢癌は地域偏在性を有することから、施行地域と対象を選んで行うUS検診は胆嚢癌の早期発見にきわめて有効な方法であると考えられた。

17) 胆嚢癌との鑑別が困難であった急性壊死性胆嚢炎の1例

羽賀 正人・坂井洋一郎 (新潟勤医協下越病)
山川 良一 (院内科)
斎藤 俊一・五十嵐 修 (同 外科)
富樫 満・阿部 実 (新潟大学第三内科)
鬼島 宏・渡辺 英伸 (同 第一病理)

症例72才女性。主訴背部痛。現病歴。62年1月11日便所で転倒。同12日第8胸椎圧迫骨折の診断で当院入院となる。入院後第34病日より、右季肋部痛・発熱及び入院時正常であった肝胆道系酵素の上昇を認めた。ECHO等から胆嚢体部に長径30mm大の不正隆起が描出され、